

## 続・記憶の継承について

### ～言葉を超えて未来に伝える可能性～

三上 喜美男

名古屋市立大学 22 世紀研究所特任教授  
神戸新聞論説副委員長

#### I 言葉を超えるもの

一般に人間の定義には三つあるとされる。「ホモ・サピエンス＝知恵のある人」「ホモ・ファールベル＝工作する人」「ホモ・ルーデンス＝遊ぶ人」である。

人間には学び、考えを深める知性がある。道具を使ってモノを作り、生活に役立てる。そして、遊ぶことに楽しみや意味を見いだす。いずれも他の動物には見られない特徴とされる。

もう一つ、人間と動物を分けるものを挙げるとすれば、言葉を自在にあやつる力だろう。動物の中にも、イルカのように音声などで多様な情報をやり取りする種がいる。しかし、人間のように複雑で体系だった言語は確認されていない。

人間はオウムのように学んだ言葉をなぞっているのではない。米国の言語学者ノーム・チョムスキーがいうように、人間は文法と語彙を駆使して無数の文を生み出すことができる。だから知恵をどんどん蓄積し、伝えることができる。「観念の爆発」といわれる知性の大躍進は、言葉があつてはじめて可能になったといえる。だから人間は「ホモ・ロクエンス＝言葉を使う人」とも定義される。

言葉によって人間は記憶を他者に伝えたり、文字に書き残して保存したりすることができる。言葉は「記憶の器」でもある。しかし、人間の言葉は融通無碍にどんどん姿を変える。「記憶の器」ではあるが、過去の「器」はそのまま未来の社会にも通用するとは限らない。いや、むしろ今の「器」に託すだけでは記憶は後世にきちんと伝わらないのではないか。

そうした危機意識を持って言葉を超えた情報伝達の在り方を模索する試みが続いている。前編では過去の民族的受難や災害、加害の歴史の継承にさまざまな取り組みを紹介した。続編である本稿では、未来に向けた記憶の継承の可能性について考えたい。人間は自分たちが頼りにする言葉を超えることはできるのだろうか。

#### II 福島原発神社

「福島第一原発神社」。そう名付けられたアート作品がある。（写真 1）

作者は兵庫県宝塚市在住の建築家・宮本佳明<sup>かつひろ</sup>。この作品は東日本大震災の 1 年後の 2012

年 3 月、大阪市の「橘画廊」で公開された。その後、福島県の「会津・漆の芸術祭 2012」や国際芸術祭「あいちトリエンナーレ 2013」でも展示され、注目を集めた。

東日本大震災で水素爆発を起こし、核燃料がメルトダウンする過酷事故を招いた東京電



写真 1

力福島第 1 原子力発電所(以下、福島第 1 原発)は、福島県双葉郡大熊町にある。太平洋岸に沿って北から 6、5 号機、少し離れて 1 号機から 4 号機の原子炉建屋が一行に並ぶ。

宮本は福島第 1 原発と現地の地形を 200 分の 1 に縮小した模型を作り、立ち並ぶ原子炉建屋の上に神社本殿のような和風の太屋根をかぶせた。入母屋造りや寄せ棟造りの屋根は重厚な印象だ。白一色の無機質な建築

模型に檜皮葺をほうふつさせる茶色の屋根という組み合わせが、目線を引き付ける。

震災による事故で福島第 1 原発は廃炉が決まった。冷却機能を失った原子炉の核燃料が溶け落ち、原子炉を包む圧力容器を突き破ってその外側の格納容器に漏出したとみられる。廃炉には 30～40 年かかるとされるが、具体的な見通しは立っていない。

燃料を取り出す技術も確立されていなければ、高レベル放射性廃棄物を処分する方法も場所も決まっていない。そのための資金をどう確保するかのめども立たない。分からないこと、できないことだらけなのが事故対策の現状だ。<sup>(1)</sup>

「たとえ廃炉解体に成功したとしても、それにともなう発生する大量の高レベル放射性廃棄物を福島第一原発敷地外に搬出することは不可能である。一方で、敷地内で地層処分を行うことも、処分場として想定される地下 300m 以下の地質や地下水等の条件を考慮すれば現実的ではない」。宮本はそう指摘する。<sup>(2)</sup>

しかしなぜ、福島第 1 原発は「神社」にならなければいけないのか。

そもそも神社とは何か。一言で言えば、神社は「神道の神を祭った宗教施設」である。祭りなどを通して生活に身近ではあるが、どこか恐れ多く、近寄りがたい場所でもある。多くの人におのずと畏怖の感情を抱かせる。それは、そこに「神」がいると思うからである。

日本には土地土地で多様な神が祭られている。神社という場所は、この列島の風土に根ざした、神と人間が交信する場ということができる。神についてうまく言葉で説明できなくても、どこか日本人の持つ根源的な宗教心をかき立てる場所、といえるだろう。<sup>(3)</sup>

「畏怖という感情は言葉や理性を超える。あれこれ説明しなくても、見るだけで人に畏れを抱かせる。神社の建物の形はそうした力を持っているのではないか」と宮本はそう語る。「敬して遠ざける」とでもいおうか。神社建築の持つ「霊力」に着目した点は、建築家らしい視点といえる。

荘厳な神社建築は、自然信仰のシンボルとして長い時間の中で形成され、人の心を引き付けながらも遠ざけてきた。宮本はそこに着目したと語る。

福島の廃炉作業は困難を極める。危険な放射性廃棄物を取り出すことができず、敷地内に埋めて処分することもできなければ、どうするか。チェルノブイリは全体をコンクリートの「石棺」で覆っている。福島の場合は、原子炉に耐震補強を施した上で内部に水を満たし、「水棺」状態にして冷やし続けるしかないのではないかと。少なくとも、放射線量が十分に低線量となるまで「1 万年以上はその状態を維持し続けるしかない」と宮本はいう。

しかし、どんな重大な記憶であっても継承するのは容易ではない。それどころか風化する恐れがある。それに 1 万年もたてば言語も今とは随分変わっているに違いない。現代の日本語でどんなに意を尽くした説明文を残しても、未来の日本人にその意味は理解されないかもしれない。

それでは「この場所は危険だ」「近寄ってはならぬ」という警告をどうやって伝えればいいのか。溶け出した核燃料もろとも廃炉にした「水棺」が生命体に及ぼす危険性を、言葉を用いずに未来の人に知らせることは可能なのか。

思案の末に宮本が発案したのが、神社独特の「霊気」を原発にまよわせるというアイデアだった。言葉を超えた畏怖の感情を刺激する試みである。そのためには「寺社殿が戴く大仰で様式的なデザイン」を屋根の形として借りる。原発を、敬しても近寄ることができない、土地の「荒魂を祀るアイコン」にしてしまうのである。

福島第 1 原発の建屋がことごとく神殿の形に姿を変えれば、未来の人の心にも畏怖の感情をかき立てることになるだろう。それなら核廃棄物の危険から人々を守ることになる。そう考えると、やはり福島第 1 原発は「神社」にする以外に道はない。(4)

とはいえ、神社の屋根をかぶせた建築物が、それを見た未来人に本当に畏怖の念を抱かせるかどうかは誰にも見通せない。ただ、福島原発事故は超長期に及ぶ核廃棄物処分という難題を突きつけている。宮本は現代の科学技術が答えを見いだせないでいる深刻な状況そのものを、アート作品として可視化しようと試みた。

併せて原発事故の記憶を未来に向けていかに継承するかという課題も問いかけている。

宮本自身、阪神・淡路大震災で宝塚市の生家が全壊判定を受けた被災者である。全壊家屋は公費解体が原則とされたが、宮本はかろうじて立っている木造の生家を鉄骨でギプスのように補強して再生させた。一律に解体する行政措置に抗って「もう一つの道」を提示した。

どんな大都市も巨大災害では一瞬でがれきと化す。それもあの震災を体験した人たちの

共通した思いだろう。自然の強大な力に打ち勝てる人工の構造物など存在しない。

ならば、震災で出た膨大な家屋のがれきを芦屋川の河川敷に延々と積み上げよう。都市のもろさを見せつけよう。宮本は震災翌年の 1996 年、ベネチア・ビエンナーレ建築展で、そのコンセプトを地形の模型を作って展示し、金獅子賞を受けた。<sup>(5)</sup>

大震災の被災体験と都市崩壊の教訓をどう受け止め、次世代に継承するか。その課題に、「福島原発神社」の展示によって原発事故の記憶の継承というテーマが新たに加わった。

問いへの答えを出すべきなのは宮本ではない。原発事故の場合、まずは当事者の東京電力や原発政策を推進した政府の責務である。「安全」とされた原発があわやの過酷事故に至ったことで原子力の専門家たちの責任はますます重くなったといえる。

人類は未来への重い責任を背負い込んだ。

### III 10 万年の時を超えて

原子炉で使われる発電用核燃料は、核分裂しやすいウラン 235 と核分裂しにくいウラン 238 からできている。効率よく核分裂が起きるよう、天然ウランでは 0.7% しかないウラン 235 の比率を加工して 3~5% に引き上げている。使用済み核燃料ではウラン 235 の比率は 1% に減るが、新たに燃焼過程で発生したプルトニウムが 1% 含まれる。

取り出した直後の使用済み核燃料の放射能は天然のウラン鉱石の約 1000 万倍も高い。ガラス固体化という処理を施しても約 1 万倍にしか減らない。そのままゴミとして地下に埋めるなどの「最終処分」を実施したところで、放射能がウラン鉱石と同じレベルにまで下がるには、1 万年どころか約 10 万年もかかるとされる。<sup>(6)</sup>

フィンランドで建設中の放射性廃棄物処理施設「オンカロ」のドキュメンタリー映画が 2010 年に公開され、世界的に高い評価を得た。短縮版が NHK で放送されたのは、くしくも東日本大震災が起きる約 1 カ月前の 2011 年 2 月 16 日だった。

「オンカロ」とはフィンランド語で「洞窟、空洞」という意味だという。原発から出た高レベルの放射性廃棄物を地下 400 メートル超の地層に隔離処分するための施設で、2020 年に最終処分場として創業を開始する。地下の約 12 億年前の岩盤には活断層は見つかっていないとされる。そこに危険な廃棄物を搬入する。収容可能容量は 9000 トン。搬入開始から 100 年以上たった段階で廃棄物処分は終わり、入り口は厳重に閉鎖される。エジプトのピラミッドのように二度と開封されない地中の「石棺」とする計画だ(図 1)。

そこで想定されているのは 10 万年という時間軸である。廃棄物の放射能が人間や他の生物に害を及ぼさないレベルに下がるまで確実に閉じ込める。そのためには廃棄物を埋めた場所が 10 万年後の未来まで決して開封されない対策が絶対条件とされる。

デンマーク人のマイケル・マドセンが監督した映画の原題は英語で「INTO ETERNITY」。直訳すれば「永遠の中に」。一方、邦題は「100,000 年後の安全」と付けられた。日本語の題の方が分かりやすい。<sup>(7)</sup>

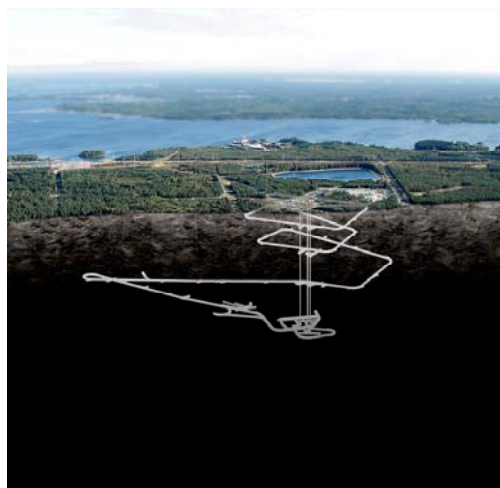


図 1

福島第一原発神社で宮本が想定する時間のスパンは1万年。オンカロで議論されているのは10万年。いずれにしても気の遠くなる時間の長さである。

なぜ10万年が放射性廃棄物の安全管理の目安になるかは先ほど述べた。では、1万年とする根拠は何か。それは米国の環境保護庁が1985年に定めた基準が基になっている。「1万年、300世代」というのが米政府の求める放射性廃棄物の管理期間とされている。<sup>(8)</sup>

その前年の1984年に記号論学者で言語学者でもある米国のトマス・シービオクが「1万年に橋かけるコミュニケーションの方法」という

論文を発表した<sup>(9)</sup>。情報工学者の名和小太郎によると、この論文は米国エネルギー省核廃棄物処理局の要求に応じて書かれたものである。

政府機関の要求とは次のようなものだった。

「核廃棄物であることを示す永続的な表示と記録を用意しておき、遠い未来においても、想定される侵入者に対してそこに何があるかを警告するようにしておかなければならない」。1万年、300世代の期間にわたり「ここに核廃棄物あり」という表示をどのように伝えればよいか、という問いかけであったという。<sup>(10)</sup>

1万年といえば、どれほどの時間のスケールなのか。

1万年前はまだ言葉を記す絵文字も発明されておらず、粘土板もパピルスも登場していなかった。人間が文字とそれを記録する媒体を獲得したのは5000年から6000年前のことだ。古代の文字の記録が残されていても、数千年前の言葉ですら解読するには専門的な研究が必要となる。それでもいまだ解読できない言語は多数ある。<sup>(11)</sup>

日本語も大きな変化を重ねてきた。例えば中世の言葉で書かれた能を聞いても一般の人は何を語っているのかよく分からないだろう。江戸時代の歌舞伎や文楽になれば現代語に近く、耳が慣れればかなり理解できるようになる。だが、古代の日本語にいたっては文法はもちろんのこと、母音の数も子音の発音も現代語とは異なり、耳で聞いても外国語としか聞こえないだろう。<sup>(12)</sup>

言語だけではない。人間の社会そのものが数十年から数百年で大きく変動する。名和が論文「1万年後に伝える」で指摘したように、1万年の時間が流れる間には戦争や革命、内乱、地震、津波、悪疫、飢饉、民族移動などさまざまな社会の地殻変動があるはずだ。度重なる大変動の中で過去から受け継がれた記憶は薄れ、形を変え、途切れるかもしれない。核の廃棄物埋設処理の危険性も忘れ去られる恐れはたぶんにある。

それでもメッセージを確実に後世に伝えなければならない。ではどうすればいいか。

シービオクは提案する。非言語的な記号を使うことを。記号によって危険性を伝えることを。私たちの時代の言語は恐らく用をなさない。だから、言葉を超えて直感的に理解できる伝達力を持つ記号とはどんなものかを探求する必要がある、と。

だが、記号が正確な伝達力を欠けばどうなるか。未来の人が「この場所に何かがある」と感じ取ったとしても、それが何かは具体的には分からない。「宝物が隠されている」と思って土地を掘り起こそうとするかもしれない。かつて欧米の学者が危険を度外視してピラミッドの内部を発掘したように、である。

先に紹介したフィンランドのオンカロでも、処理場計画の関係者や政府の責任者が同じ懸念を映画の中で口に出している。外部の目から厳重に隠す工作を施せば施すほど、かえって未来の人類に「何かとても貴重なものが眠っているに違いない」と誤解されるかもしれないというのだ。

10 万年後の人類がどんな反応を示すかを想定することなど、無理な話ともいえる。オンカロの映画の中では「いっそ何もせず、忘れ去られるまま放置しておけばいいのではないか」という開き直りのような意見も紹介されている。ただし、その場合も放置すれば本当に忘れ去られるかどうかの問題になる。長い時間の中で記憶の内容が変わることは珍しくない。変に誤解されてはならず、忘れられるに任せるのなら、完全に忘れてもらわなければならない。

しかし、確実に記憶を社会から消し去る手立ては分からない。忘れてもらえるかもしれないし、忘れてもらえないかもしれないのだ。

答えはまだ見つからない。だからといって未来につけ回しをすることだけは許されない。後の世代に危険が及ばぬよう、廃棄物を出した今の世代が責任を持つ。そうした倫理観を欠いてこの問題を議論することはできないだろう。

#### IV 未来へのメッセージ

非言語的な記号に託される使命は、未来の人に「危険」を伝えることだ。それが可能な記号とはどんなものか。世界各地でそれを探求する取り組みが続けられている。

米国ニューメキシコ州にある米国核廃棄物隔離試験施設(WIPP)は、放射性廃棄物の恒久的な処分を目的に設けられた、米国で最初の地層処分施設だ。地下 600 メートル超も掘り下げた岩塩ドーム層をくり抜いて造った巨大な空洞。そこには主にプルトニウムなどで汚染された中・低レベルの放射性廃棄物が持ち込まれている。米国のジャーナリスト、アラン・ワイズマンによると、核爆弾製造に使用されたぼろ切れや機械を解体した残骸、放射能を帯びた配管や電線などのゴミが全米の保管施設から運ばれてくるという。

先に触れたように、米国では向こう 1 万年にわたる放射性廃棄物の安全管理が義務づけられている。課題の一つは周辺の野生動物保護区をハイキングする人たちを WIPP からどうやって遠ざけるか、だとされる。<sup>(13)</sup>

問題は今でなく遠い未来のことである。



500年から600年もすれば現在の言葉はほとんど理解不能になる。ではどうするかという問題が言語学者、文化人類学者、科学者らによって議論された。とりあえず施設外に現在の7言語で警告を掲示する。その上で絵や図を加えることとする。7言語とは国連公用語の英語、ロシア語、フランス語、中国語、スペイン語、アラビア語と現地の先住民ナバホ族の言葉である<sup>(14)</sup>。ただそれは数百年程度の安全性を考慮した対応にすぎず、やがて用をなさなくなる。重要なのは時間を超えてメッセージを伝える絵や図の考案だ。

いつの時代でも危険を伝える伝達力のある視覚的表現とはどんなものか。

国際標準化機構（ISO）は2007年に放射性廃棄物の処理場に関する危険を表現したシンボルを決めた。赤い三角形の上に放射性物質を示すお馴染みのマークがあり、そこから下に放射線を表す波線の矢印が扇状に延びている。その左下には黒い髑髏の絵、右下には外側に向かって逃げる人の姿。高レベル放射性物質が埋設されている設備などが破壊されることのないよう、近づいた人への警告として考案された記号だ。（図2）



図2

ただ、これもしょせんは現代人の感性と文化に基づいて描かれた絵図である。名和も指摘しているように、この記号が1万年後、10万年後の世代にどう理解されるかは何とも判断が難しい。<sup>(15)</sup>



図3

建築家の宮本佳明はアート作品「福島第一原発神社」で神社の屋根の形を原発に載せる案を提示した。人々の心におのずと大きな危険に対する畏れの感情を抱かせる視覚的表現があるのではないかという問い掛けだ。

日本でも知られるノルウェーの画家ムンクの絵画「叫び」（図3）のような絵はどうだろう<sup>(16)</sup>。これなら切迫した状況が伝わるのではないか。そんな議論もまじめになされている。確かに、絵を見た人は尋常ではない気配を感じ取るかもしれない。だが、それが果たして核廃棄物の持つ桁外れの危険性を伝えるメッセージになり得るだろうか。

時代も場所も文化の差異も超越した人類普遍のデザインはあるのか。それを見いだすには、世界各地でさまざまな絵図を用いた研究をもっと重ねる必要がある。

## V さまざまな記憶のかたち

2回に分けて記憶の継承にまつわる課題を考えた。ここで前編も含めてこれまでの議論を整理したい。

ポーランドのクラクフでは、侵略の被害を何百年も伝える伝統の儀礼について考えた。

受難の記憶を幸運の催しに反転させた現地の祭りの姿にも触れた。

ドイツでは、ナチス時代の「負の歴史」を掘り起こし、未来に伝えようとする取り組みを見た。取り上げたのは、障害者などの強制安楽死を進めた「T4 作戦」を伝えるモニュメントの整備と、虐殺などの犠牲になったユダヤ人の名前と生年月日、死亡した日付などを刻んだ敷石を居住地跡の路面に埋め込む「つまずきの石」プロジェクトである。

続編では、東日本大震災の原発事故をテーマにした建築家宮本佳明のアート作品について考えた。「福島第一原発神社」と題した作品は、今後も安全に保管し続けねばならない核廃棄物の危険性を 1 万年後の世代にどう伝えるか、という難問を投げ掛ける。

フィンランドの高レベル放射性廃棄物処分施設「オンカロ」では、10 万年後の未来に核廃棄物の危険性をどう伝えるかが課題とされている。米国の廃棄物処理施設 WIPP の取り組みと併せ、警告のメッセージを遠い未来にどう継承するかという模索を概観した。

人間集団が共有する記憶を「集合的記憶」と呼ぶ。集合的記憶は集団全体にとって意味のある事柄を伝えるために受け継がれてきたといえる。

記憶を継承するためには、ドイツの戦争モニュメント建設や博物館展示のように文字化、視覚化した情報を中心に保存、展示するという方法がある。それは人々に「学習」する機会を提供する社会的な役割を担う。

一方、敷石を路面に埋め込むアートプロジェクトは、参加者が史実を学ぶだけでなく、敷石を見た人がその意味を考える機会を提供する。それは何かを感じて自由に思いを巡らす能動的な「鑑賞」の要素が強い取り組みといえる。記憶の痕跡を市街地の路上に残すことで、未来の人にも自由にその意味を考える機会を提供することになる。

クラクフに伝わるラッパなどの伝統儀礼や祭りは「学ぶ」「鑑賞する」以上に、祝祭として人々が「楽しむ」ことが大切な要素になっている。祭りに参加し、その形を受け継ぐ行為を通して由来や過去にあった出来事を知る。過去を共有する行為は集団意識の醸成にもつながる。それが祭りという「文化」として定着することで記憶は継承される。

災厄などの「負の歴史」はいつしか「正の歴史」に転化、昇華される場合もある。楽しむ要素が重きをなすことが肯定的な意味への転化に関係しているのか。クラクフの「ライコニク祭り」は記憶の移り変わりについても考えさせてくれる。

核廃棄物の危険性は何百世代、何千世代にわたって情報（記憶）を正確に伝え続けねばならない。私たちは福島原発事故によって逃げようのない問題として対応に迫られているが、考えるべき時間軸は 1 万年から 10 万年先であり、これまでの経験や蓄積が直ちに生かせるとは考えにくい。日本の先に行く米国やフィンランドでは、時間と場所を超えてメッセージを伝える「人類普遍の記号表現」の模索が現実の課題とされている。

歴史の中では、忘れられたかに思えた集合的記憶が何かをきっかけに呼び起こされ、社会の表面に浮上することがある。「想起の文化」と呼ばれる社会的現象で、ドイツでは戦後 40 年を節目にユダヤ人大量虐殺「ホロコースト」をめぐる議論がわき起こった。恥と当惑



の感情を抱えて長く沈黙していた人たちが老境を迎え、積極的に体験談や目撃談を語り始めたのである。

表象文化論などを専攻する香川檀は、先の大戦でドイツが行った大量虐殺やナチズムの犯罪的行為を記憶にとどめる取り組みを、著書「想起のかたち」で芸術表現の観点から考察している。それによると、共同体のアイデンティティーに関わる記憶には「コミュニケーション的記憶」と「文化的記憶」がある。古代エジプト文化を研究するヤン・アスマンが提唱した概念だそうだ。

コミュニケーション的記憶では、出来事の体験者が生々しい記憶を語り、同時代の人と記憶を分かち合おうとする。記憶を受け取った人は特別な使命感を持って記憶を他者や若い世代に伝えようと努力する。「語り部」と呼ばれる戦争や災害などの記憶継承活動がこれに当たる。

ただ、記憶を引き受ける使命感や義務感が維持されるのは3～4世代までとされる。100年もすればコミュニケーション的記憶は失われる可能性がある。その後も記憶が受け継がれるには、儀礼や神話、舞踊、衣装といった形に「制度化」されることが重要になる。制度化された記憶は文化的記憶として生き残る。文化的な営みが社会に定着することで、集団のアイデンティティーに関わる重要な記憶と認識されるからだ、という。<sup>(17)</sup>

これらを踏まえれば、「T4作戦」のモニュメント事業はコミュニケーション的記憶の性格が強く、「つまずきの石」は文化的記憶として定着を目指す試みといえるだろう。一方、クラクフのラッパの伝統儀礼や祭りは文化的記憶とみなしていい。

記憶を長く継承するには文化として制度化するアプローチが有効といえそうだ。それには「学ぶ」「鑑賞する」に加えて、記憶に基づく活動を共に「楽しむ」要素をいかに取り入れるかが重要な鍵となる。

ただ、核廃棄物の危険性を何万年先の後世に伝えるとなると、文化的なアプローチですらどこまで記憶の持続性が保てるか分からない。もともと文化は時代や場所によって異なり、伝播しやすいが、変化もしやすいものだ。極めて多様性、個別性が強く、わずかな違いが集団同士の対立や排除、差別意識を生むこともある。

過去の侵略や戦争では、征服者が被征服者の文化を徹底して破壊した例が少なくない。文化は異文化によって排除され、抹消される恐れがある。

言語もそうした文化の一つだ。ただでさえ変容が激しく、異文化にのみ込まれて消え去ることもある。文化の違いを越えてメッセージを未来に届けるには、人類共有の感性や感情に訴えかけるような、言葉を超える「何か」を見いださねばならない。

人間は基本的に同じように世界を認識し、同じように考える。異なる部分よりも共通する部分が多いのは確かだろう。少なくとも知的能力には民族や人種で何も変わらないことを、欧米の認知心理学者が比較研究を通して確認したという<sup>(18)</sup>。

人間には知性もあれば、道具を使ってモノを作り、遊びに喜びを見いだす。何より言葉を自由にあやつる。それだけでなく、人間は集団をつくる生き物である。人間らしさの中心には他者を排除する以上に他者と「共感する力」があると言っていい。

未来人も現代人と同じ心を持ち合わせているとすれば、どんなに言葉や文化が違っていても同じ感情を共有できるのではないか。感情を超えて普遍的な概念につながる手掛かりを探すことで課題が解決できる可能性がある。

つまるところ、記憶継承の考察は「人間とは何か」を探求することだといえそう。過去と現在に学び、自分たちのことをよく理解しようとする努力が、未来を考える出発点となるだろう。作家の堀田善衛が述べたように「未来からの挨拶」が私たちの周りにひそんでいるとすれば、それをうまく見つけることが 22 世紀を考える手掛かりになる。

人間はいつの時代も人間に共感を覚えるはずである。

(文中、敬称略)

- 
- (1) 東京電力の「廃炉プロジェクト」のホームページによると、現在は中長期ロードマップの第 2 期に当たるが、解け落ちた核燃料の取り出しは工法の検討をしている段階だ。
  - (2) 橘画廊 HP から全文を読むことができる。
  - (3) 場所と神道の神は密接に結び付いている。「神という観念がなければ、神社は成り立たない。逆に神社がないと、神の働きを共同体が確認する場がさまよう」と宗教社会学者の井上順孝は指摘する(「神道入門」平凡社新書、2006 年)。国語学者、大野晋も「日本人の神」(河出文庫、2013 年)日本の古代の「カミ」の性格について「山や坂や川の瀬などを領有・支配していた」とする。現代の地鎮祭にも土地を占有しているカミに物を供えて許可を乞う意味がある。土地に存在するカミ(神)は今も畏怖の対象とされている。
  - (4) 福島第 1 原発 3 号機ではウランとプルトニウムを混合させた MOX 燃料を用いるプルサーマル発電が行われていた。福島の被災者であり作家で僧侶の玄侑宗久は、宗教学者鎌田東二との対談で核の危険性を問題提起する立場から「プルサーマル神社」の建立に言及している。人間は制御できない核を神としてまつことが可能か、という問い掛けだ。プルサーマルはウラン燃料発電よりも危険性が高く、震災事故によって激しい「荒魂」の性格があわらになったと玄侑はいう。「荒魂」をどう鎮めるかは科学技術の大きな課題でもある(「原子力と宗教」鎌田、玄侑、角川学芸出版、2012 年)(152-161 頁)。
  - (5) この展示は日本館で公開された。タイトルは「亀裂」。建築家・磯崎新がコミッションを務め、建築家・石山修武、写真家・宮本隆司との共同出展だった。宮本隆司は後に阪神・淡路大震災の写真集も出し、世界的に評価された。
  - (6) 楠戸伊緒里「放射性廃棄物の憂鬱」祥伝社新書、2012 年、60-101 頁参照。
  - (7) 映画は DVD で見ることができる。本編 79 分。税込み 3990 円。アップリンクが発売。
  - (8) 日本も地層処分を目指している。日本原子力環境整備機構の HP は次のように説明する。「高レベル放射性廃棄物と一部の低レベル放射性廃棄物は、私たちの生活環境から長期間にわたり隔離する必要があります。そのため、地下 300 メートルより深い安定した岩盤へ埋設＝地層処分します」「期間が限られていれば、人間の管理により安全性を確保することが可能ですが、寿命の長い放射性物質が含まれている廃棄物については、数万年以上にわたる有効な対策を考える必要があります」。処分の候補地は自治体からの応募方式だったが、2015 年から政府主導に転換し、国が国内の「科学的有望地」を提示することが同年 5 月、閣議決定された(首相官邸 HP 参照)。自治体の動きでは、高知県東洋町が 2006 年、文献調査に応募したが、翌年の町長選で反対派が当選し取り下げたことがある。
  - (9) Thomas A. Sebeok -Communication Measures to Bridge Ten Millennia(April 1984)
  - (10) 名和小太郎「1 万年後に伝える」2012 年 4 月 5 日、「科学技術情報発信・流通総合システム」(J-STAGE)の HP で公開。
  - (11) 米国の進化生物学者ジャレド・ダイヤモンドは、氷河期が終わって以降の 1 万 3000 年の人類史を著書「銃・病原菌・鉄」(草思社、上下巻、2001 年)にまとめた。人類は 1 万 3000 年ほどの間に文字や金属製の道具を発明し、産業を発達させた。そう考えると、

---

1 万年は人類文明のほぼ全体を見通す時間の長さといえる。上巻 16-21 頁参照

(12) 現代の日本語の母音は「あいうえお」の五つだが、奈良時代には八つだったという説がある。万葉集の時代、馬の鳴き声は「ひん」でなく「い」だったとされ、擬音語の感覚も現代と違っていた。現代語までの変遷で古文の特徴である係り結びがなくなるなど文法にも変化があった。山口仲美「日本語の歴史」(岩波新書、2016 年) 参照。

(13) アラン・ワイズマン「人類が消えた世界」、早川書房、2008 年、304-321 頁参照。

(14) “Permanent Markers Implementation Plan” August 19, 2004, United States

Department of Energy Waste Isolation Pilot Plant

(15) このシンボルを選定するに当たって、IAEA は米世論調査会社ギャラップの研究所による調査を世界 11 カ国で行い、男女、年齢層、教育レベルの異なる人々を対象に、「危険、近寄るな」の意味が伝わるかどうか、反応を確かめたと説明する。“New Symbol Launched to Warn Public About Radiation Dangers” 15 February 2007. IAEA は商用目的以外の使用を認めている (Measures to strengthen international cooperation in nuclear, radiation and transport safety and waste management)

(16) ムンクの著作権は 2015 年で消失し、「叫び」のイメージは著作権フリーとなった。

(17) 「想起のかたち 記憶アートの歴史意識」15-22 頁

(18) 「銃・病原菌・鉄」上巻 26-27 頁

著者連絡先 ; 三上 喜美男 (Kimio Mikami)

名古屋市立大学 22 世紀研究所

〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1

E-mail; mikami-km @ kobe-np.co.jp (使用時@前後のスペースを除去して下さい)

Published online; February 24, 2017